

【ポスター発表】

ひとり親とその交際相手で形成されるステップファミリーの生活理解をめぐる一考察
ー当事者へのインタビュー調査からー

○ 梶山女学園大学 氏名 小榮住まゆ子 (06307)

キーワード：ひとり親とその交際相手・ステップファミリー・ソーシャルワーク

1. 研究目的

ソーシャルワーク研究において、ステップファミリーの脆弱性や機能不全は古くて新しい問題である。特にステップファミリー形成過程初期の「ひとり親とその交際相手から成る継親子関係のある生活状況」は、当事者らが口外しない限り理解や把握は難しく、DV・虐待等の問題が起きて初めて介入・支援に至ることも少なくない。しかし、ステップファミリーとのソーシャルワーク研究は発展途上にあり、子どもにとって重要で潜在的にストレスの多いライフイベントであるひとり親家庭からステップファミリーへの移行をめぐる研究の欠如こそ問題であるとの指摘もある (Todd M. Jensen, et al. 2017)。そこで本報告では、ひとり親とその交際相手で形成されるステップファミリーの生活理解の視座への示唆を得ることを目的に探索的検討を行ったので報告する。

2. 研究の視点および方法

ステップファミリーの生活理解の視座をその脆弱性と家族レジリエンスの視点に置き、ステップファミリー当事者を対象にスノーボールサンプリング手法による半構造化インタビュー調査を2024年1～3月に実施した。録音データを逐語的に文字化し、SCAT（大谷2007）の質的分析方法を参考に内容分析を行った。尚、調査協力を得た5家族8名の内、本研究目的に該当したのはひとり親世帯の実母1名とその交際相手1名であった。

3. 倫理的配慮

本報告における引用・参考文献等については著作権保護に基づき、研究目的以外に使用しないことを誓約するとともに社会福祉学会研究倫理規程を遵守する。また、調査については梶山女学園大学人間関係学部における人を対象とする研究に関する倫理審査内規に基づく倫理審査の承認（41）を得た上で行っている。表記には人物が特定されないように、イニシャルとは無関係なアルファベットを用いている。尚、本研究に関連して開示すべき利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

個別インタビュー調査の所要時間は、ひとり親家庭の女性（44歳）が80分、その交際相手の男性（40歳）が90分であった。表1は調査結果の概要である。

表1 インタビュー調査結果の概要

ジェノグラム		
	ひとり親家庭 実母A	ひとり親家庭 実母Aの交際相手B
ストーリーライン	Aが20歳時に未婚・認知無で長女Cを妊娠・出産。相手方は事実を知ると逃げ音信不通。Cを親戚宅に預け休日のみ一緒に過ごす生活を送る。A26歳、Cが小1にあがる際、利用できるひとり親関連の免除/助成制度は全て活用し三世同居の母子家庭生活を始め。A29歳、Cが小3時に以前恋愛関係にあったEと再会。当時は女性・子ども等弱者を見下す態度に嫌気がさし別れたが「今度こそうまくいくかもしれない」という思いから結婚適齢期を考へ29歳で結婚、新たな地域でAの世帯とEの同居開始。31歳で長男Dを妊娠・出産後、今の地域へ引っ越す。当初良好だったEとCの親子関係は徐々に悪化。中学生になりCはEへの拒絶から家出を繰り返し不登校となる。出産直後のAは経親子関係に対処する余裕がなく、Cのしつけや再登校をめぐる絶えない夫婦喧嘩からCの育児拒否をEへ伝え、家庭内別居を経て、Dが小1にあがる際に協議離婚。産みの父親は1人だけ、会いたいときに会える実父子関係の維持にむけ、Dの親権・監護権はAがもち、養育費をもらいながら母子・地域は変えずに再び三世同居での母子家庭生活が始まる。離婚後もE方祖父母とは良好な関係性だったAが祖母宅へ月2回の宿泊面会交流が今も続く。一方、AはCが高校中退後の17歳、Dが小1の時に離婚をめぐる相談相手であった元同僚Bと交際がはじまり現在、6年目。前回の結婚生活で二度と子育てはしたくないと思うほどストレスフルだったことから、子どもはもちたくないこと、結婚に自分に向いていないことを伝えA宅にBが出入りする生活が始まる。Aのこうした言動の背景には父親の厳格さ、抑圧により自由のない幼少期の育ちがあると自覚しており、多様なライフスタイルを実現したい欲求が高い。DはBを「お兄ちゃん」と呼称し友達のような関係で2人で遊びに行くこともある。一方、Cは家では「おじさん」と呼ぶが面と向かって呼称することはなく、成人後、別居していることもあり当たらず触れず関係性を育てる。パートナー同士の会話の多くが子どもたちのことで、特に同性であるDの育児で協力してもらうことが責任のない交際相手に子育ての協力をお願いしていることへの葛藤感情も抱く。それでも、子どもにとって現パートナーを含め大人が周りに沢山いて色々な経験や挑戦ができるこの環境を大切にしつつ、自分の時間も大切にしたいストレスのない適度な距離感のある婚姻関係に囚われない今の生活を維持したいと考えている。また、経きようだい関係はBのみ経きようだいである事実を理解しているが、Dは知らないままである。真実告知はDが理解ができる年齢になってからと思っている。また、現状の家族形態でいることはほぼ口外していない。	
	Bは、離婚相談にのっていた元同僚Aの長女Cが高校中退前後の17歳、長男Dが小1の時、子どもと遊ぶのも楽しかったためあまり深く考えずに交際を始め6年目となる。結婚の意思がない恋愛関係ゆえに同居する両親へは交際事実を報告していない。Aの家計とは別々だが、子どもと2人で出かけるときはBが全額支払う慣習になっている。付き合ってからAから子どもを持ちたくないと言われたとき、Bも実子と経子で対応に差ができるからいいと同意する。綺麗好きでBはA宅へベットの世話をしに平日はほぼ毎日仕事帰りに寄り、週末は趣味優先で泊まったり泊まらなかったりの生活を送っている。Cとは出会った当初、生い立ちを知らない女子高生であったことから気をつけていたが、Aと家に引きこもるCの進路選択や不登校をめぐる考え方の違い、Dをめぐる学校行事への父親としての参加や生活習慣をめぐるしつけについても相違があり口論が絶えない時期があった。子どもたちのしつけの責任はAにあると認識しながらも背負う必要のない親としての責任をもっていたこと、また、互いの定位家族から引き継ぐジェンダー規範に基づく役割分担と生活習慣の違いにいらだちを感じ高葛藤を抱いていた交際3年目あたりが最も不穏な関係性で、Dが泣くほど叱るなど庄のある言動が多かった。しかし、次第にお互いの価値観の違いを受け入れ、話し合いをもち、ある程度、あきらめたり、気になるほうがするといった手段で回避し、パートナー同士で喧嘩や口論に発展しないよう工夫するようになった。また、「僕の子どもではない、勝手に育つ」と恋愛関係だからこそ子育てについて割り切れたことで楽になり、それ以降、Aの家族とはストレスのない適度な距離感のある関係性へと変化していった。一方で、児童扶養手当がもらえなくなるとA家族の生計が成り立たないことも理解しているため、事実婚も選択せず恋愛関係のままにしていることになっている。現在、思春期で心身の変化から実母子関係があまりよくないため、食生活や勉強等についてはBがAより厳しく叱るときもあるが、子どもの成長にあった対話方法、叱り方の工夫・模索をし、Aからも「女きようだいで育った自分にはできないこと」としてBのDに対する言動は許容されている。また、Dから欲しいものをねだられると「実父Eに買ってもらえ」と伝えるが、Eへは言うことができない様子からBが買うこともあり、DにとってBは実父でも経父でもない「別居する家族」「中途半端にいない存在」として、Aや同居する祖母よりもBの言動に従っているように感じている。自分の趣味の時間も大切にしつつ、独りでは得られない家族のような経験が得られる今の関係性を維持したいが、近い未来訪れる互いの老親の介護等についてはそれぞれが見ることにしている。	
理論記述	・定位家族のジェンダー観がステップファミリー形成に多大な影響を与えるが、対話や経験から役割認識を変えることもできる。 ・定位家族経験や離婚・再婚等の経験がステップファミリーのあり方を含めた型にはまらない自由なライフスタイルの選択に影響を与える。 ・経父娘関係が原因で離婚するが、実父子関係は維持できるよう工夫している。 ・ステップファミリーの発達段階や家族特性で抱いてしまうカップル間の葛藤解決になる。 ・ひとり親家庭への助成制度の利用が恋愛関係でいること理由にもなっている。 ・法律婚をする予定はないため周りに口外しない。 ・パートナーとの相互支援関係は、子育て生活においてのみで老親介護においては維持しない。	
	・定位家族のジェンダー観がステップファミリー形成に多大な影響を与えるが、対話や経験から役割認識を変えることもできる。 ・経親の場合、子の血のつながりの有無は子育て方針に影響を及ぼす。 ・経親は実親代わりとしての責任や役割ではなく、育ちを見守る大人の一人として役割をもつことでステップファミリーの発達段階や家族特性で抱いてしまうカップル間の葛藤解決になる。 ・ひとり親家庭への助成制度の利用が恋愛関係でいること理由にもなっている。 ・法律婚をする予定はないため周りに口外しない。 ・パートナーとの相互支援関係は、子育て生活においてのみで老親介護においては維持しない。	

5. 考察

調査結果を通じて、定位家族から引き継ぐジェンダー規範と役割、未婚出産によるひとり親家庭経験、ステップファミリーの発達段階や家族特性を背景としたパートナーや継親子間の軋轢、子どもの不登校・中退等「交差性」から生じる高葛藤が確認できた。また婚姻関係にないステップファミリーの場合より一層口外を避ける傾向があり当事者の孤立化が懸念される。一方、交際相手が父親の責任や役割から解放され育ちを見守る継父の役割へと移行し、構成員それぞれが家族の枠組みに囚われないライフスタイルを選択できたことでサブシステム間の関係性が改善されたと考えられる。これまでステップファミリーの脆弱性として語られていた曖昧な境界線をポジティブに捉え直すことで、心地よい距離間の相互支援システムを創出する可能性が示唆された。

【文献】

大谷尚（2007）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法—着ししやすい小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（発達科学）』54（2），27-44.
Todd M. Jensen, Kevin Shafer and Erin K. Holmes（2017）Transitioning to stepfamily life: the influence of closeness with biological parents and stepparents on children's stress, Child & Family Social Work, 22（1），275-286.